

2025(令和7)年度

甲南女子大学

教育実習・合格体験記集

甲南女子大学 教職支援課

目 次

◇ 1-1. 各種体験記（総合子ども学科-幼稚園課程、小学校課程、保育課程）	
◇ 幼稚園教育実習 感想文 総合子ども学科 石田 実聖	2
◇ 小学校教育実習 感想文 総合子ども学科 辻井 梨瑚	3
◇ 小学校教育実習 感想文 総合子ども学科 藤本 ひなた	4
◇ 合格体験記（幼稚園） 総合子ども学科 平藪 柚奈	5
◇ 合格体験記（小学校） 総合子ども学科 田村 菜々美	6
1-2. 各種体験記（日本語日本文化学科・国際英語学科-中高課程）	
◇ 中学校教育実習 感想文 日本語日本文化学科 黒木 怜華	7
◇ 高等学校教育実習 感想文 国際英語学科 松田 琴巴	8
◇ 合格体験記 日本語日本文化学科 関 ひかり	9
◇ 合格体験記 国際英語学科 岩崎 百華	10
1-3. 介護等体験記	
◇ 特別支援学校・社会福祉施設における介護等体験の感想とまとめ	
◇ 総合子ども学科 辻井 梨瑚	11
◇ 総合子ども学科 大江 みやび	12
1-4. 各種体験記（医療栄養学科-栄養教諭課程）	
◇ 栄養教育実習 感想文 医療栄養学科 山中 小雪	13
1-5. 各種体験記（看護学科-養護教諭課程）	
◇ 目指す養護教諭像と4年間の教職課程の学び「教職実践演習（養護教諭）」を終えて考える自己課題	
◇ 看護学科 河野 美佑	14
◇ 看護学科 前川 奈々	16

幼稚園教育実習 感想文

総合子ども学科 石田 実聖

私は母園である私立の幼稚園にて、年長組（5歳児クラス）を担当し、4週間の幼稚園教育実習をさせていただきました。年長児は就学を控えた時期であることから、一人ひとりの姿により丁寧に向き合い、保育者としての責任や役割の大きさを意識しながら実習に取り組みました。

年長組の子どもたちは、友達と自分の思いを伝え合う力が育っている一方で、考えの違いから思いがすれ違ってしまいう場面も見られました。そのような姿に寄り添う中で、保育者がすぐに解決するのではなく、子ども自身が相手の気持ちに気づき、気持ちを整理できるような関わりが大切であることを学びました。また、一人ひとりの思いを受け止めながら、集団全体の様子を見守ることの難しさと、その重要性を実感しました。

実習を通して特に印象に残ったことは、保育者の言葉掛けが子どもの行動や気持ちに大きな影響を与えるということです。年長児は「自分で考え、行動したい」という意欲が高く、担任の先生はすぐに答えやすべきことを伝えるのではなく、「どうしたらいいと思う？」「次は何をする時間だったかな？」と問い掛ける関わりを大切にされていました。そのような言葉掛けによって、子どもたちは自分で状況を判断し、次の行動へと移す姿が多く見られました。私自身もその関わりを意識して実践する中で、子どもが達成感を得て自信を深めていく様子を見ることができ、言葉掛けの大切さを実感しました。

また、年長児であっても視覚的な援助が安心感や見通しに繋がることを学びました。活動の流れや一日の予定を掲示することで、子どもたちは次に何をするのかを理解し、自分から行動する姿が見られました。就学を見据えた生活の中で、自分で考えて動く力を育てるためには、環境を整えることも保育者の大切な役割であると感じました。以前の施設実習で学んだ視覚支援の重要性を踏まえ、年齢や発達段階に応じた援助の工夫が必要であることを改めて学びました。

この4週間の実習を通して、幼稚園教諭という職業のやりがいや魅力を再確認するとともに、自身の課題にも気付くことができました。子どもへの関わり方や声掛けのタイミング、集団への働き掛けなど、実習生としてまだ至らない点も多くありますが、先生方からの助言や温かい言葉を通して、自分の保育を振り返る貴重な機会となりました。

今回の実習で得た学びや経験を大切に、今後も子どもの姿を丁寧に見取りながら、一人ひとりが安心して自分らしく過ごせる保育を実践できる保育者を目指して、継続して学び続けていきたいと思えます。

小学校教育実習 感想文

総合子ども学科 辻井 梨瑚

私は、3年生のクラスで4週間の教育実習を行いました。実習前は、子どもたちと関わることへの期待がある一方で、4週間の実習をやり切ることができるのだろうかという不安も抱いていました。しかし、実習を終えた今、教員という仕事の責任の重さとともに、それを上回る大きなやりがいを実感しています。

実習期間中は、子どもたち一人ひとりの表情や反応に目を向けながら関わることを大切にしました。初日は緊張していましたが、授業中だけでなく、休み時間や給食、掃除の時間など、日常のさまざまな場面で積極的に関わることを意識しました。ともに過ごす中で、少しずつ関係を深めることができました。子どもたちが自然に話しかけてくれるようになったことから、教員が日常の中で丁寧に関わるのが、子どもにとっての安心感や信頼感につながることを学びました。

授業づくりにおいては、授業が比較的スムーズに進む一方で、子どもたちの理解が本当に定着しているのかという不安を感じる場面がありました。その中で、ただ流れよく進めるのではなく、子どもたちが間違いやすい点や勘違いしやすい部分を意図的に取り上げ、全体で考えを共有する時間を設けることが、授業の山場を生み、学習内容の定着につながることを学びました。正解をすぐに示すのではなく、それぞれの考えを聞き合い、なぜそのように考えたのかを言葉にすることで、子どもたちの理解が深まっていくことを実感しました。この経験を通して、子どもたちが主体的に考える時間を大切にすることの重要性を学びました。

また、授業後には必ず自分自身で振り返りを行い、良かった点や改善すべき点を整理するようにしました。うまくいかなかった場面については、「次はどのような声かけをすればよいか」「どのような工夫ができるか」を考えることで、次の授業に生かすよう心がけました。こうした振り返りを重ねる中で、授業への向き合い方や子どもを見る視点にも少しずつ変化が生まれていきました。

実習中は、多くの先生方の授業を見学する機会もありました。同じ教科であっても、学年やクラスの実態に応じて授業の進め方が工夫されており、授業づくりの奥深さを学ぶことができました。さらに、担任の先生の学級経営からも多くの学びを得ることができました。子どもたちが自分で考え行動できるよう日々丁寧にに関わり、様々な工夫をすることが落ち着いた学級づくりにつながっていることを学びました。

教育実習を通して、教員を目指す気持ちがより一層強くなりました。この実習で得た学びを大切にしながら、日々の関わりや授業を通して子ども一人ひとりに寄り添い、安心して学校生活を送れるよう支えていける教員を目指して、今後も学びを重ねていきたいと思いません。

小学校教育実習 感想文

総合子ども学科 藤本 ひなた

4週間の小学校教育実習を通して、子どもたちと日々関わりながら、多くの学びを得ることができました。授業や学校生活のさまざまな場面に関わる中で、教師としての役割や、学校という場の在り方について考える時間となりました。

実習中、私が特に意識していたことは、すべての子どもと関わることです。特定の子どもとだけ過ごすのではなく、1日に1度は全員と話すことを目標にしました。休み時間には外で元気に遊ぶ子どもだけでなく、教室内で静かに過ごしている子どもにも、自分から声をかけるようにしました。実習当初は反応が少なかつたおとなしい子どもが、後半には自分から話しかけてくれるようになり、日々の関わりの積み重ねが信頼関係につながることを実感しました。また、子どもだけでなく、教員以外の職員の方々とも積極的に話すことを意識しました。清掃員やサポーターの方など、学校で働く多くの方々と挨拶や会話を交わす中で、学校は多くの人に支えられて成り立っていることを改めて感じました。

実習期間中には、多くの授業を担当させていただきました。毎時間、略案を作成し、指導の流れや発問、板書の構成を考えながら準備を行いました。最初は授業を進めることに意識が向き、子どもの反応を見る余裕がない場面もありましたが、振り返りを重ねる中で、子どもの様子を見ながら柔軟に指導する大切さに気づきました。

さらに、先生方の授業見学を通して、子どもの発言を生かしながら授業が展開されていく様子を見て、子どもの考えを大切にしたい授業づくりの重要性を学びました。自分の授業でも子どもの発言を取り入れようと努めましたが、想定外の意見にうまく対応できず、難しさを感じることもありました。しかし、実習後半には、子どもの反応を受け止めながら授業を進める意識が少しずつ身についてきたと感じています。

実習の後半には、朝の会や帰りの会、掃除、給食などの生活場面での指導にも関わらせていただきました。日常の関わりの中で、担任の先生から「ゆったりとした話口調は、子どもに寄り添うための武器になる」と助言をいただき、子どもへの声のかけ方や関わり方を改めて意識するようになりました。

実習開始前は、4週間という期間を長く感じていましたが、子どもたちとの関わりが深まるにつれて、時間の経過がとても早く感じられるようになりました。実習の最終日には、子どもたちがお別れ会を開いてくれ、一人ひとりが書いてくれたメッセージや折り紙から、4週間の関わりが心に残っていたことを感じました。

今回の教育実習を通して、教師として日々の関わりを大切にしながら、さまざまな方と関係を築いていく姿勢の重要性を学びました。この経験を今後の学びに活かしていきたいです。

合格体験記

幼稚園教諭一種免許状・保育士資格取得
総合子ども学科 平藪 柚奈

今春より、私は神戸市内にある私立の幼稚園型認定こども園に就職します。幼い頃、担任の先生の温かさに憧れを抱いていました。「いつか自分も、子どもたちにとってそんな存在になりたい」その思いが、幼稚園教諭を目指す原点となりました。

大学入学後は、保育園・施設・幼稚園での実習を通して、多様な保育・教育の在り方に触れました。その中で、自分が心から共感できる教育方針を持つ園で働くことが大切だと実感しました。この気付きが、私の就職活動の軸となりました。

4月末、就職フェアに参加しました。フェアでは、一度に多くの園の話を開ける貴重な機会であるため、事前に通勤可能な範囲の園を調べ、気になる園をいくつかリストアップして臨みました。また、園ごとに同じ質問をすることも意識しました。同じ問いであっても、園の方針や大切にしていることによって回答が異なり、自分に合う園を見極める手がかかりになったからです。そしてフェアで興味を持った園を中心に、実習先を含めて約5園を見学しました。実際に子どもと関わる保育者の姿を間近で見ることで、園の雰囲気や職員同士の関係性、子どもへの関わり方がより具体的に伝わってきました。その中で、特に教育方針に共感し、保育者の姿勢に魅力を感じた実習園で採用試験を受けることを決めました。

採用試験は「ピアノ実技」と「個人面接」の2つでした。面接では、園のどんな点に惹かれたのか、実習で学んだことをどう活かしたいのか、自分の言葉で伝えられるよう、事前に頭の中で練習しました。一言一句覚えるのではなく、話したい軸を明確にしておくことで、自然な気持ちで臨むことができたと思います。

就職活動では、自信をなくしたり、他の人と比べて落ち込んだりする瞬間もあると思います。しかし、将来どんな保育者になるかは誰にも分かりません。だからこそ、気負いすぎず、今の自分が大切にしたい価値観を信じて進むことが何より大切だと感じています。

この体験記が、これから就職活動に臨む方々の参考になれば幸いです。最後になりましたが、大学生活を通して支えてくださった先生方、職員の皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

合格体験記

幼稚園教諭一種免許状・小学校教諭一種免許状取得
総合子ども学科 田村 菜々美

私はこの春から、兵庫県で小学校教員として働くことになりました。教員採用試験への準備期間を振り返ると、日々の積み重ねが合格につながったと感じています。以下は、教員採用試験を受けるまでの対策についてまとめています。私の経験が、少しでも皆さんの参考になれば幸いです。

私が教員採用試験を意識し始めたのは、大学 2 年生の時です。この頃に小学校全科の参考書を購入し、筆記試験の勉強を始めました。最初は手探りの状態でしたが、大学 3 年生になると危機感が芽生え、より計画的に学習を進めるようになりました。まずは参考書を解き、自分の苦手や課題を洗い出しました。その後は自分の苦手な分野を中心に、自分なりに要点をまとめながら繰り返し解くようにしていました。基礎固めができれば、問題集や過去問に取り組みました。筆記試験の勉強では、調べたり人に聞いたりしながら理解を深め、最終的には自力で解けるようにすることを大切にしていました。

大学 4 年生からは面接や模擬授業、場面对応など、実技試験に向けた準備を本格的に始めました。面接では文章を考えるのではなく、質問に対して自分が話したいキーワードを考えて数種類ずつ書きだすようにしていました。それをもとに自然に語るができるよう、面接練習を重ねました。その中で、これまで自分が経験してきたスクールサポーターの活動が、話の根拠となるエピソードになっていると感じました。友人や先生方と実際に練習する中で多くのアドバイスをいただき、自分の受け答えや話し方の癖に気付けたことも大きな学びでした。また、特に苦手意識のあった場面对応については、とにかく数をこなすことから始めました。まずは全自治体の過去問や問題集に対して自分なりの答えを書き、キーワードをまとめました。その後に面接形式で話すことで、実際に人と話す練習を重ねました。数をこなしたことで場面の傾向ごとに相応しい対応を練ることができ、自信をもって話せるようになりました。

教員採用試験に向けて準備してきた期間は、知識や技能を身に着けるだけでなく、自分自身と向き合うことのできる時間でもありました。春から教員として働くことにまだ不安はありますが、大学で学んだことやこれまでの経験を活かし、日々精進していきたいと考えています。これまでの大学生活を通して、たくさんの先生方にお世話になりました。本当にありがとうございました。

1-2. 各種体験記（日本語日本文化学科・国際英語学科-中高課程）

中学校教育実習 感想文

日本語日本文化学科 黒木 怜華

今回の教育実習を通して、教師という仕事の責任の重さと同時に、その大きなやりがいを実感した。実習前は、授業を分かりやすく進めることが教師の主な役割だと考えていたが、実際にはそれ以上に、生徒一人ひとりと向き合い、成長を支える存在であることが求められていると感じた。

授業準備では、指導案の作成に最も苦勞した。学習指導要領を踏まえながら、限られた時間の中で何を身につけさせたいのかを明確にし、どのような発問や活動を行えば生徒の理解が深まるのかを考える必要があった。実際の授業では、想定していた反応が得られないことも多く、説明が長くなってしまったり、生徒の理解度を十分に把握できなかったりする場面もあった。しかし、指導教員の先生から助言をいただき、授業後に振り返りを重ねることで、次第に生徒の反応を見ながら柔軟に対応することの大切さを学んだ。

また、授業以外の場面でも多くの学びがあった。朝のホームルームや休み時間、清掃活動などを通して、生徒が学校生活の中でさまざまな悩みや不安を抱えていることを知った。何気ない会話の中で見せる表情や言葉から、生徒の気持ちを汲み取り、安心して過ごせる環境をつくることも教師の重要な役割であると感じた。生徒から名前を呼んでもらえたり、相談を受けたりした経験は、大きな喜びであると同時に、信頼に応える責任を強く意識するきっかけとなった。

さらに、教職員の方々の姿から、チームとして学校を支えていることも学んだ。授業や学級運営だけでなく、行事の準備や事務作業、生徒指導など、目に見えない多くの仕事で学校運営を支えていることを実感した。忙しい中でも生徒のことを第一に考え協力し合う先生方の姿は強く印象に残っている。

今回の教育実習を通して、自分自身の未熟さを痛感すると同時に、教師になりたいという思いがより一層強くなった。うまくいかないことも多かったが、その一つ一つが貴重な学びであり、今後の成長につながる経験であったと感じている。この実習で得た学びを今後の学生生活に生かし、生徒一人ひとりに寄り添い、成長を支えられる教師になれるよう努力していきたい。

高等学校教育実習 感想文

国際英語学科 松田 琴巴

私は母校の高等学校で 3 週間教育実習を行いました。実習が始まる前は不安や緊張でいっぱいでしたが、始まってみると大変だけれどとても楽しく学びの多い実習になりました。

スケジュールの関係で実習二日目から実際に授業を行いました。他の先生方の授業見学に行けずいきなりの授業実践はとても不安でしたが、担当教員は「私がしたい授業をすること」が大事だとアドバイスをくださいました。今まで指導案を作るのが苦手で実習では明日の指導案を今日作らなくてはならない状況に耐えられるのかと焦りもありました。しかし、生徒を前に授業をしてみると模擬授業では曖昧だった生徒観がとてもはっきりし、目の前の生徒に合わせて授業を作ることができ自分でも驚くほど楽しく速く指導案を書き上げられました。

2 週目からは生徒たちと多く関わることができました。3 年生なので勉強の邪魔にならないよう気を付けながら、進路相談や英語の勉強法などの悩み相談から普段の何気ない会話の中で生徒それぞれの個性や性格が見えてきました。そうやって関係性を構築していくと授業でも生徒の発言が増えていき主体的、積極的に授業に参加してくれるようになりました。

3 週目には研究授業を行いました。多くの先生方に授業を見ていただく機会では緊張と不安で押しつぶされそうでした。しかし、生徒たちが「一緒に頑張りましょう！先生！」と励ましてくれ、授業が始まるといつもと変わらず明るい様子で授業を受けてくれました。その姿に私も緊張がほぐれ、授業は私一人ではなく生徒と共に作り出しているのだなと改めて実感しました。

教育実習を楽しく行うことができたのは間違いなく生徒のおかげだと思います。最後に私のために花束やメッセージを用意してくれていて、泣きながら「先生の授業わかりやすいし楽しかった！」と言ってくれて私の頑張りがこの言葉ですべて報われた気がします。

この 3 週間で教師の在り方、そして実際の教育現場について学ぶことができ、生徒と先生方にもたくさん支えていただき、そしてとても貴重な経験をさせていただき、私自身大きく成長することができました。教育実習が改めて教師として働くモチベーションにつながりました。この経験を活かして理想の教師像に近づけるようにこれからも頑張っていきたいと思います。

合格体験記

中学教諭一種免許状（国語）・高等学校教諭一種免許状（国語）取得
日本語日本文化学科 関 ひかり

私はこの春から、兵庫県の中学校で国語科教員として働きます。小学校、中学校での恩師との出会いをきっかけに、自分も生徒の明るい未来を支えることのできる教員になりたいと思うようになりました。そして、高校生になってもその夢を持ち続けていたことから、教員育成のサポートが充実している甲南女子大学に進学し、4年間、教員免許状の取得と教員採用試験合格に向けて精励しました。

大学生活では、授業や教育実習の一日一日を大切にに取り組むことはもちろん、神戸市の中学校でのボランティア活動にも積極的に参加しました。実際の学校現場で生徒と関わる中で、教師という仕事のやりがいや責任の大きさを実感し、「やはり自分は教師になりたい」という思いがより一層強くなっていきました。目標達成のためにやるべきことが多く、大変に感じることもありました。隙間時間を有効に活用することを意識しながら、学校生活とアルバイトやサークル活動を両立し、充実した毎日を過ごすことができました。

教員採用試験に向けた本格的な勉強を始めたのは、試験の年の年明けからでした。筆記試験対策として、毎日大学に通い机に向かうことを習慣化し、過去問題を繰り返し解きました。また、Teacher's Caféを活用し、友人や先生方とともに面接や模擬授業、場面指導の実践的な対策を行いました。その中で、自分が受験する自治体の試験傾向や教育方針、特色について深く理解しておくことが、効率よく受験勉強を進める上で重要であると感じました。

教員採用試験に向けて取り組む中で、勉強や対策が思うように進まなかったり、周囲と比べて自信を失ったりして、不安になることもありましたが、そのたびに先生方や友人、家族の存在に支えられ、前向きな気持ちを取り戻すことができました。悩んだときには一人で抱え込まず、周囲の人に頼ることの大切さも実感しました。自分の頑張りを見てくれている人がいると感じられたことで、これまでの努力は無駄ではなく、必ず結果につながると、自分を信じることができました。

教職課程を履修する中で、忙しさや失敗を経験し、気持ちが沈むこともあると思います。しかし、やりたいことと両立しながら教員になるための学びに向き合う4年間は、きっと自分自身の自信や人間力の向上につながります。これまで支えてくれた周囲の方々への感謝の気持ちと、自分自身の努力を信じて最後まで諦めずに取り組んだことが、今回の合格につながったと感じています。

この合格体験記が、これから教員を目指す皆さんの励みになれば幸いです。

合格体験記

中学教諭一種免許状（英語）・高等学校教諭一種免許状（英語）取得
国際学部国際英語学科 岩崎 百華

『教員になる』という目標を胸に神戸市の中学校・高等学校を受験し、今春から教壇に立つことになりました。高校生の頃に出会った恩師の存在がきっかけで教員を目指すようになりました。

甲南女子大学に入学後は、教職課程の仲間と共に学び、模擬授業を作成するなど、日々切磋琢磨しながら過ごしました。教員採用試験の対策を始めたのは、3年生の春頃、面接練習は4年生の春頃から取り組みました。神戸市の試験内容や傾向を調べ、過去問に目を通しながら、ほぼ毎日のように大学の図書館で勉強していました。図書館には同じ目標に向かって努力する仲間の姿があり、その存在に何度も励まされ、「私も頑張ろう」と前向きな気持ちになることができました。

面接練習はTeacher's Cafeで多くのご指導をいただきました。他学部の生徒とも交流ができ、さまざまな意見を聞けたことは、視野を広げる貴重な経験だったと感じています。また、二次試験の模擬授業では英語科の先生に指導案を何度も見ていただき、空き教室で繰り返し練習を行いました。このように、私が神戸市の教員採用試験に合格できたのは、熱心に支えてくださった先生方、共に努力した大学の友人、そして家族の支えがあったからこそだと思っています。

「教員になりたい」という思いがさらに強くなったのは、教員採用試験の結果を待つ期間に行われた教育実習でした。授業準備など大変な日々もありましたが、多くの生徒と関わる中で、「教師に絶対になりたい！」「生徒の成長を近くで見守りたい！」という気持ちが確信へと変わっていきました。実習が折り返しを迎えた頃、教員採用試験の結果が発表され、合格の知らせをいただくことができました。

実習中、担当学年の先生から最終日に、「わかる・楽しい授業も大切だが、時には『わからない・楽しい授業』も求められる」という言葉をかけていただきました。その言葉は、これから教員として歩いていく上での大切な指針になると感じています。大学や教員採用試験で学んだこと、ボランティア活動を通して得た経験を生かし、春からは教師として自分らしく、一步一步成長していきたいです。

◇ 1-3. 介護等体験記

特別支援学校における介護等体験の感想とまとめ

総合子ども学科 辻井 梨瑚

私は、知的障害部門小学部のクラスで介護等体験を行いました。2日間の体験を通して、実際に現場に入り、子どもたちや先生方と直接関わることで、大学の講義だけでは得ることのできない、実感を伴った学びを得ることができました。

初日は、クラスには自分の言葉でうまく話すことが難しい子どもが多く、「コミュニケーションを取ることができるだろうか」「信頼関係を築くことができるだろうか」といった不安を抱えながらのスタートでした。しかし、自分から挨拶をしたり、目を見て話しかけたり、笑顔で頷いたりといった関わりを丁寧に積み重ねていくうちに、子どもたちが少しずつ心を開いてくれるようになりました。ある子は私の手をそっと握ってくれたり、膝の上に座ろうとする仕草を見せてくれたりと、言葉以外の方法で気持ちを伝えてくれる姿が増え、温かい気持ちになりました。この経験を通して、言葉だけでなく、表情や態度、仕草、雰囲気など、さまざまな方法で心を通わせることができるのだと気づき、私自身の関わり方への意識も大きく変わりました。また、先生方の関わり方や支援の工夫からも多くのことを学びました。一人ひとりの状態や特性を理解し、その子に合った声かけや距離感を大切にしながら、安心感を与えるように関わる姿が印象的でした。できたことを見逃さず、その場でしっかりと褒めて伝える姿から、教育には知識や技術だけでなく、温かい心配りや配慮が必要不可欠であると感じました。さらに、言葉で気持ちを伝えることが難しい子どもに対しては、イラストカードを用いながら、「何がしたいのか」「どのように感じたのか」を一緒に考える支援が行われていました。子どもが自分の思いを安心して表現できるようにするためには、言葉以外の手段も含め、その子に合った方法を選び取っていくことが大切であると学びました。こうした丁寧な関わり方の積み重ねによって、信頼関係が少しずつ築かれていくのだと実感しました。

この2日間を通して私が強く感じたことは、人と関わるうえで大切なのは、知識や技術だけではなく、相手を理解しようとする気持ちや、安心できる存在であろうとする姿勢であることです。特に支援を必要とする子どもたちにとって、自分の思いを受け止めてもらえる安心感や、自分の存在を認めてもらえる経験は、日々を生きていくうえで大きな支えになるのだと感じました。だからこそ、まずは自分自身が温かく、落ち着いた関わりのできる存在でありたいと思いました。私は将来、小学校教員を目指しています。今回の介護等体験で得た学びは、特別支援の場に限らず、すべての子どもたちと関わるうえで大切にしたい視点ばかりです。一人ひとりの特性やペースを理解し、丁寧な関わりを通して、安心できる学級づくりができるよう、今後も学びを深めていきたいと思っています。

社会福祉施設における介護等体験の感想とまとめ

総合子ども学科 大江 みやび

私は、成人知的障害者更生施設において、5日間の介護等体験を行った。実習は主に通所室を中心に行い、通所室の利用者が帰宅された後には、入所室において1時間程度の実習にも参加した。通所室では食事補助や利用者の作業・活動の支援を行い、入所室では入所者の作業に対する援助や見守りを行った。利用者の方々は、施設設立当初から利用されている方が多く、年々高齢化が進んでおり、平均年齢は40歳から50歳前後であった。1日目は、まず通所室における一日の流れを把握し、利用者の名前を覚えることを目的として、一人ひとりと積極的にコミュニケーションを取った。通所室の利用者は14名程度で、そのうち2名は聴覚に障害を持つ方であった。聴覚障害のある利用者の方とは、簡単な手話や指文字を用いて意思疎通を図った。

通所室では、朝に一日の活動内容を利用者とともに確認するミーティングを行い、その後、季節の体操、ラジオ体操、エビカニクス、口腔体操を実施した。体操後は施設周辺へ散歩に出かけ、帰園後に昼食の準備を行った。昼食時には、服薬が必要な利用者の確認を行い、食事に介助が必要な方への食事補助を行った。利用者の中には、一人で食事を取ることが難しい方や、食事を一気に口に運んでしまう方がおられたため、安全に配慮しながら支援を行う必要があった。特に注意した点は、お盆の上にある食器を自分で持ち、一度に食べようとする行為である。少しずつ食べることを意識してもらうために取り皿を使用した。取り皿の中身がなくなると次々に手を伸ばされるため、声かけや見守りを行いながら対応した。食事の配分やタイミングを考えながら支援することの難しさを実感した。

作業活動では、利用者が自分で選んだ作業に取り組んでいたが、すぐに作業に取りかかる方もいれば、なかなか手が動かない方もおり、利用者それぞれに違いが見られた。作業が止まってしまう利用者には、「これをしますか」「こちらにしますか」といった閉じられた質問を用いることで、選択しやすい環境を整え、作業への参加を促した。

2日目以降も基本的な活動内容は同様であったが、新たに送迎時の添乗にも参加した。送迎の添乗は2回行い、ケアホームに入居されている利用者や、ご家族と同居されている利用者の生活の様子を見学した。ケアホームでは、4名の利用者が住宅街の中にある一軒家で共同生活を送っており、それぞれに個室が用意され、自分の好きな物に囲まれた生活をされていた。職員は常駐しているものの、利用者の自立度が高く、日常的な支援は最小限であった。一方、ご家族と同居されている利用者については、帰宅時にその日の様子を家族へ伝え、家族からの連絡事項を受け取るなど、家庭と施設の連携の大切さを学んだ。

この5日間の実習を通して、障害のある利用者の方々と関わる中で、「援助する」のではなく「支援する」ことの重要性を学んだ。利用者の方々が自分らしく生活するためには、できないことを代わりに行うのではなく、できることを尊重し、必要な部分を支える姿勢が大切であると感じた。今後の生活、教員になった際に活かしたいと思う。障害の有無関係なく、相手を理解し、尊重し、支援という温かい視点を持ち続けていきたい。

1-4.各種体験記（医療栄養学科・栄養教諭課程）

小学校教育実習 感想文

医療栄養学部医療栄養学科

山中 小雪

私は、神戸市立の小学校において5日間、栄養教諭の実習をさせていただきました。短い間でしたが、多くの経験を積むことができました。

その中でも、特に印象に残っていることが二つあります。

一つ目は、授業の作り方についてです。実習を通して、授業を作る際には、「児童に何を学んでほしいのか」を意識することが重要であると気づきました。私は、子どもたちの前で授業を行うのが、今回の実習が初めてでした。児童に会う前に学習指導案を作成した際は、児童の姿を想像するよりも、先生からどのような指摘を受けるかを考えながら作っていました。しかし、指導担当の栄養教諭の先生から「この授業で、子どもたちに何を学んでほしいの？」と問いかけられ、ハッとしました。その問いを意識し学習指導案を作成すると、スムーズに授業構成を考えることができました。また、授業には発問が欠かせませんが、当初は授業を円滑に進めるための発問ばかり考えていました。「児童に何を気付かせたいのか」を明確にした上で、「その気付きに繋げるためにどのような発問が必要か」を考えることがいかに大切かということ学びました。

二つ目は、児童との交流です。私は、6年生のクラスを担当しました。最初は、どのように接すれば良いのか分からず、戸惑いました。児童と同じ目線で関わるべきか、教師としての態度を取るべきか悩み、そのことを先生に相談しました。すると、「どの立場であっても子どもたちに寄り添う態度が必要だよ」とご指導をいただきました。その言葉を意識しながら児童と接すると、次第に児童と打ち解けることができました。勉強につまづいている児童や、友達と喧嘩してしまった児童には積極的に声をかけるよう心がけました。すると、実習最終日に、児童から寄せ書きをプレゼントしてもらいました。その後、校長先生から「寄り添う姿勢が児童に伝わったから、寄せ書きを貰えたのだと思います。」とお言葉をいただきました。自分の頑張りが児童に伝わっていたのだと思います本当に嬉しかったです。さらに、児童にもう一度会いたいと思い、実習終了から1ヶ月後に行われた音楽会にも足を運びました。

この他にも、実習期間中には多くの経験をさせていただきました。大変なこともありましたが、先生方のご指導のおかげで、今後の人生に活かせる貴重な学びを得ることができました。

1-5. 各種体験記（看護学科-養護教諭課程）

目指す養護教諭像と4年間の教職課程の学び「教職実践 演習（養護教諭）」を終えて考える自己課題

看護学科 河野 美佑

大学教職課程の授業や演習を通して私は、「子どもの行動や健康の背景にある発達・感覚・環境を総合的に理解し、学校全体で子どもを支える視点」が養護教諭にとって不可欠であることを強く実感した。これまでは、子どもの訴えを表面的に捉えてしまうことがあったが、学びを重ねる中で、行動の背後にある感覚特性や発達段階、家庭背景、その子自身のアイデンティティまで、多面的に理解する重要性を認識するようになった。

その中でも特に印象に残ったのは、感覚と発達の学びである。子どもの「落ち着かない」「姿勢が崩れる」「集中が続かない」といった行動は、努力不足や性格だけではなく、触覚・前庭覚・固有感覚といった基盤的な感覚が未熟であることが背景にある場合が多いという点だ。例えば、文字を書くのが苦手な子に対して、練習量の不足として扱うのではなく、身体の使い方や力の入れ方、姿勢保持の難しさといった感覚面の課題が隠れている可能性がある。この視点を持つことで、子どもの行動を否定せず、その子に必要な支援を考える姿勢が養われた。私は、行動だけを切り取って評価するのではなく、「なぜこの行動になるのか」を丁寧に考え寄り添うことのできる養護教諭でありたい。

また、子どもの理解には発達段階を踏まえることが欠かせない。低学年の子は「歯が抜けること」を病気の種類のように捉えることや、身体の仕組みについて未発達の理解を示すことも多い。一方で高学年になると、自分の身体の変化や健康問題について少しずつ客観的に捉えられるようになる。特別支援学校の事例では、児童の腹痛の訴えが身体の不調ではなく、衣服の締め付けによる不快感であることもあった。言語化が難しい子どもに対しては、表情・姿勢・環境変化など、あらゆるサインから状況を読み取る必要がある。私は、子どもの発達や個性を尊重し、理解できる言葉や方法で説明し、その子のペースに合わせて関わる姿勢を大切にしたいと考える。

さらに、授業や教育実習の中で学校内の連携の重要性も強く感じた。養護教諭は健康の専門職として個々の児童を深く理解しようとするが、担任教員はクラス全体の動きを踏まえながら、学習活動の維持も考えなければならない。それぞれの立場が異なるからこそ、情報共有と対話を重ねる必要がある。例えば、保健室の利用が多い児童に対して、健康上の理由なのか、心理的要因なのか、あるいは学級環境の問題なのかを多角的に捉えるためには、養護教諭と担任、場合によってはスクールカウンセラーや保護者とも連携することが欠かせない。私は、校内の多職種と協働し、学校全体で子どもを支える中心的な存在としての養護教諭像が大切であると考えている。

多様性の学びも大きな気づきとなった。LGBTQに関する視聴覚教材では、当事者が安心してカミングアウトできる環境が整っていない現実や、偏見から生じる苦しさが語られていた。性の多様性は特別なものではなく、健康や自尊感情に深く関わる要素の一つである。学校は子どもが最も多くの時間を過ごす場であり、自分らしさを否定されずに過ごせる環境は極めて重要だ。養護教諭が多様性を肯定するメッセージを日常的に発信していくことで、子どもが安心して自己を表現できる学校づくりにつながる。私は、どの子も「自分らしくいい」と感じられるような支援や情報提供を行える養護教諭を目指したい。

前述で述べたこと全てに共通する点として、「養護教諭は子どもの困難をともに受け止

め、背景を理解し、必要な支援につなぐ“寄り添う専門職”である」ということである。感覚の偏り、発達のおまづき、学習の困難、家庭環境、性の多様性など、子どもが抱える課題は一つではない。それが複雑に絡まり、言葉にならない形で表れることも多い。だからこそ、子ども自身がうまく説明できない“困っているサイン”を丁寧に拾い上げる存在であることが大切だと学んだ。私は、子どもが保健室で弱さを見せてもいいと思えるような、「安心できる先生」でありたい。

このことから、私が目指す養護教諭像は、「子どもの行動の背景を深く理解し、発達・感覚・多様性・生活背景を総合的に捉え、学校全体と協働しながら、すべての子どもが安心して自分らしく過ごせる環境をつくる存在」である。この大学での学びを活かし、子どものこれからをともに支えられる養護教諭を目指しながら、社会に出て職業人として今後、成長していきたい。

目指す養護教諭像と4年間の教職課程の学び「教職実践

演習（養護教諭）」を終えて考える自己課題

看護学科 前川 奈々

教育実習（養護実習）前まで、私は保健室とは児童生徒をいつでも受け入れてくれるあたたかな場所と捉えていた。それは小学校の頃、保健室が私にとって安心できる場所であり、養護教諭がいつも笑顔で迎えてくださった経験が強く残っているためである。しかし、教職課程での学びや教育実習での体験を通して、養護教諭の役割は単なる居場所づくりにとどまらず、児童生徒の心身の健康や学校全体の安全を多角的に支える専門職であると実感した。以下では、4年間の学びを整理し、明確になった私の目指す養護教諭像と自己課題について述べる。

教職課程で学ぶ中で、養護教諭は児童生徒の来室対応だけでなく、学校環境衛生の管理や教職員・関係機関との連携など児童生徒には見えないところで学校全体に関わる多面的な役割を担っていることを理解した。特別な教育ニーズのある児童生徒に対しても機能面のみに注目するのではなく、なぜその行動をするのかという背景やプロセスを理解することが重要であると学んだ。教育実習では、発達の特徴を持つ児童がタブレットを活用することにより授業に参加しやすくなっている場面を見た。児童生徒の特性や興味関心を理解し、その子に合わせて周囲の関わり方や環境を調整することで、子どもの学修参加や成長のきっかけとなることを実感した。このような支援が学校全体で行われるよう働きかけることも養護教諭の役割であり、A市教育委員会指導主事の講話から「支援体制において養護教諭は関係機関との連携における核となり、専門的視点に基づいた意見を求められる存在である」というお話があった。養護教諭は学校と児童生徒、保護者、関係機関をつなぐ核となる存在であると理解した。

さらにLGBTsについて学ぶ中で、多数と異なる不安や、更衣など学校生活に関連する葛藤を抱えていることを知った。私は小学校で養護実習を体験したが、中学校・高等学校に養護実習に行った学生の発表を聞くことで気づいたこともあった。保健室来室者の共通点のなかには、女子校ではLGBTsに関する掲示物を設置し、月経や精神面の相談がしやすい環境を整えている学校もあり、養護教諭が主体的に情報提供を行うことを通して相談しやすい環境を整えていることに気づいた。LGBTsについては、カミングアウトの有無の選択はその児童生徒それぞれだが、養護教諭が積極的に理解の姿勢を示し、いつでも安心して相談できる環境を整えておくことは養護教諭として不可欠な支援だと考えることができた。加えて、このような環境があることは児童生徒が安心して挑戦できることにつながり、児童生徒にとっての安全基地となることで児童生徒の心理的安寧を支えていると考える。

また、保健室は居場所として機能することは重要である一方で、児童生徒が保健室に依存することなく教室に戻ることができるよう調整することも求められる。すべての訴えに対応し続けると、本当に支援が必要な児童生徒の対応が不十分になる可能性もある。これはどの発達段階における保健室でも共通しており、特に高等学校では単位や出席日数に影響するため、判断力がより重要になる。元K市学校長の講話では、「良い養護教諭は保健室の扉を上手に開け閉めできる」という言葉が印象的だった。保健室来室を受け入れるか教室に戻すかという判断は養護教諭の専門性の1つと言える。実習中にも頻回来室の児童対応について、養護教諭より「その日の子どもの心身の状態によって判断が異なるため見極めが非常に難しいが、日頃からコミュニケーションと話しやすい環境作り、教職員との情報共有が見極めには欠かせない」とのご助言をいただいた。学校が教育活動の場であることを前提に専

門職としての判断が求められることを改めて認識した。

さらにケースメソッド教育によるディスカッションを通して、学校生活を長期的に捉える視点の必要性に気づいた。特に、事例の児童の学校行事の参加の可否について検討した際、当初の私はどのようにすると対象児童が安心して行事に参加できるのかという短期的な視点のみで考えていた。しかし、学校は集団行動の場である特徴を踏まえ、時間的制約や他の児童の戸惑いなどを考慮すると、無理な参加がかえって安全面や人間関係においてリスクとなることを理解した。同時に、自分の考えの背景には小学校最後の行事だから参加させてあげたいという私自身の感情が影響していたことに気づいた。当日の成功ばかり重視するのではなく、学校行事後も学校生活は続いてくという先を見据えた長期的な視点が養護教諭として求められると学んだ。

以上の学びを踏まえて、私の目指す養護教諭像は児童生徒に寄り添う居場所であると同時に、広い視野を持ち学校全体を見通し専門性を発揮し、安心して学校生活を営めるよう支える存在である。その実現に向けた自己課題は、①感情と専門的判断を切り分けること②広い視野で物事を捉え長期的視点で支援を検討すること③保健室を教育活動の一部と位置づけ適切に扉を開け閉めする判断力であると考えている。児童生徒が安心して挑戦できる環境を整え、心理的安寧を支える養護教諭を目指し、今後も学びを深めていきたい。